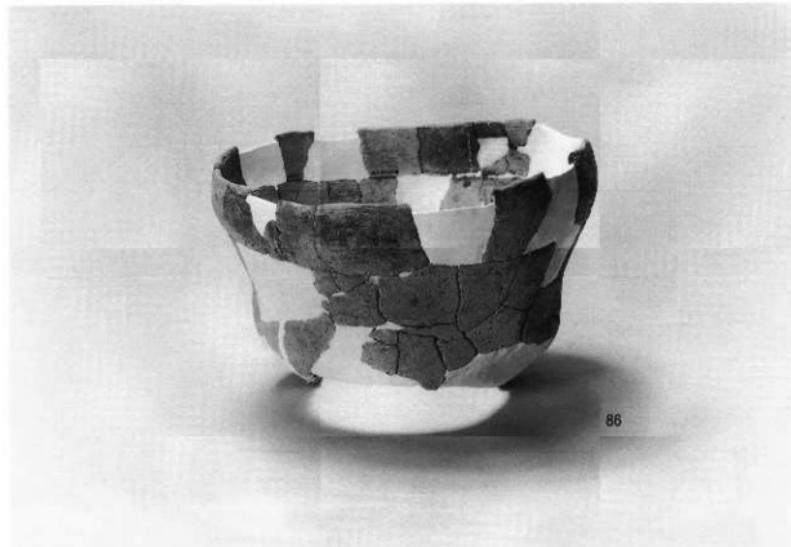
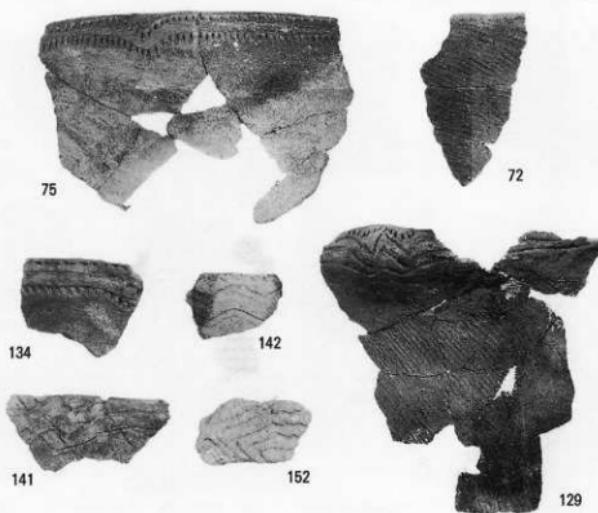


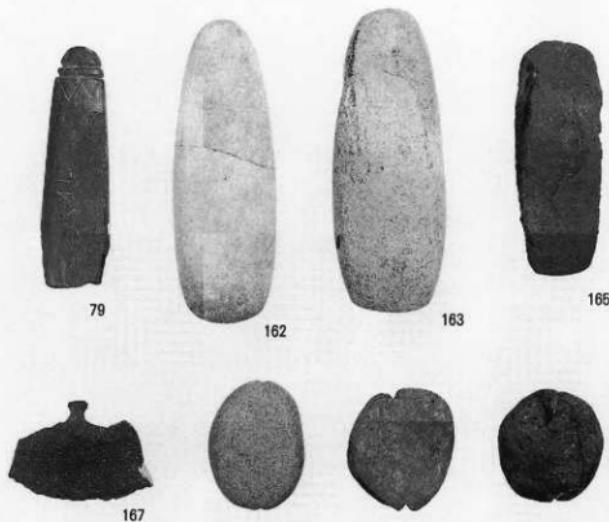
堅穴出土遺物



15号土坑出土遺物



竖穴·包含層出土遺物



土坑·包含層出土遺物

第Ⅲ章 上の原第4遺跡の調査

第1節 調査の概要

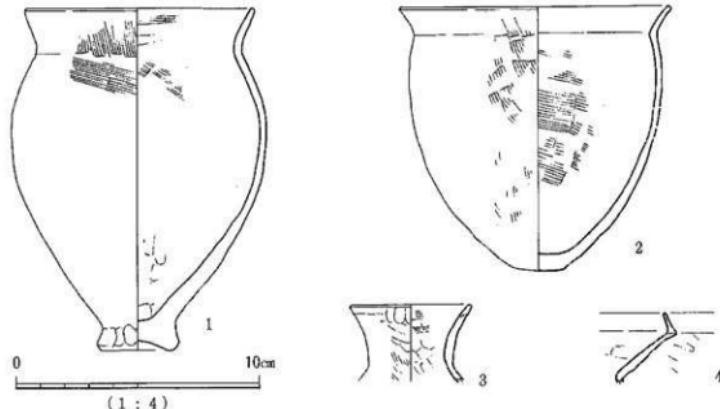
上の原第4遺跡は、第1遺跡の北方の台地上に立地する。標高は第1遺跡とほぼ同じで、その間には谷が入る。谷部との比高差は約10m弱である。調査対象面積は約3,400m²で、数段に造成された段々畑となっていた。基本的な層序は第1遺跡と共通する。なお、遺跡の位置や周辺地形については、報告書第Ⅰ集・第Ⅱ章の第2図（「時屋地区遺跡周辺地形図」）を参照されたい。

調査の結果、標高の低い側の畑地で弥生時代終末期～古墳時代初頭の文化層が遺存することが確認された。IV層以下層では、わずかにIV層下部で土器片・石鎌・剣片が数点出土したのみで、遺構は捉えられなかった。

第2節 調査の記録

III層上面にて2基の土坑状凹部と16基の小穴を検出したが、遺物が出土しているものや性格の判明したもののは皆無であった。樹根や自然の營力によるものと考えられる。

また調査地中央部を横断する道路のすぐ北側（14-54区）で、土器片が集中して分布する箇所が確認された。土器片はIc層中よりまとまって出土しており、遺構の可能性があると見て精査したが、風倒木の影響もあり振り込み等は捉えることができなかった。「土器集中区」と呼称することにする。



第1図 「土器集中区」出土遺物 (1/4)

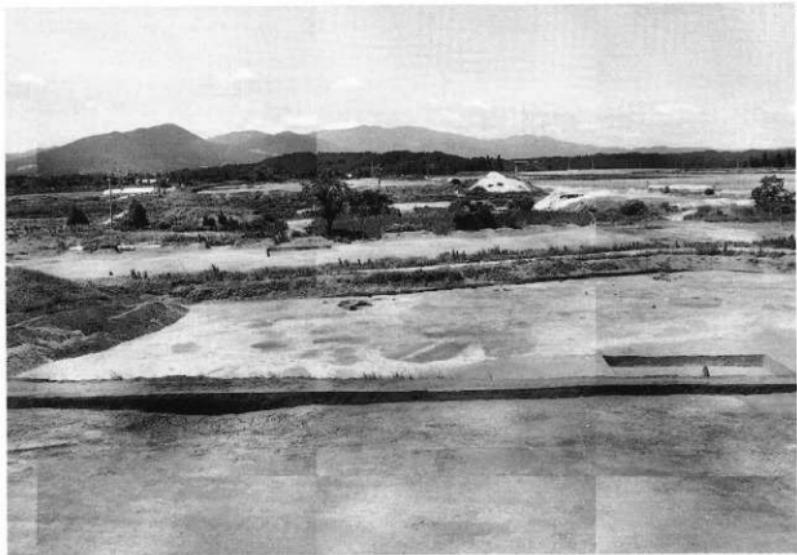
「土器集中区」出土遺物（第1図）

比較的まとまる7個体の土器が出土している。その他、小破片も多数見られた。図示した土器はその一部である。弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての特徴を有している。

1・2は壺で、いずれも浅黄橙色を呈し、外面は繊維痕を残す工具ナデ調整が施される。1は上げ底、2は安定しない平底となる。3は單口縁壺の口縁部。浅黄橙色を呈し、工具ナデ調整がなされる。4は二重口縁壺の口縁部で、橙色を呈する。やや風化気味。

第3節　まとめ

以上、簡単に概要を記したが、「土器集中区」とした箇所以外に目立った人類の営みの痕跡を捉えることができなかった。ただし、IV層下部には極めて密度が低いながらも文化層が遺存していると推測され、「土器集中区」と共に、該期の時屋地区全体に関わる事象として、考慮に入れるべきであろう。



上の原第4遺跡全景



「土器集中区」

第Ⅳ章 白ヶ野第3遺跡A地区の調査

時屋地区遺跡群の最北端近くに位置する。標高は約92m。調査開始時は、東側が一段落ちて、東九州自動車道の調査地（白ヶ野遺跡）および白ヶ野第3遺跡B地区に続いていく状況であった。その辺りの在り方については報告書第1集の第II章を参照されたい。

調査対象面積は約300m²で、掘り下げの結果、北西方向に注ぎ込む形の埋没谷の存在が確認された。Ia層（表土）下には二次堆積のアカホヤ層が見られ、ここから縄文土器・剥片や近世陶磁器の小破片が少量出土している。

また一部Ⅲ層（アカホヤ層）以下層の掘り下げを行い、数点の土器片が出土している。

以上、調査概要をごく簡単に記述したが、当遺跡の主体はより東側にあると見られ、その文化層の端部にあたるところであったと捉えている。

図版



埋没谷検出状況

第V章 おわりに

時屋地区の発掘調査の成果報告については、すでに第Ⅰ集（「上の原第3遺跡」）と概要報告書が3冊刊行されており、本冊子（第2分冊を含む）の刊行をもって全てが終了することになる。さらに、当台地の歴史を解明する上では、宮崎市教育委員会が調査主体となった椎屋形第1遺跡・第2遺跡・上の原遺跡（報告書刊行済）や東九州自動車道関連の白ヶ野遺跡、上の原第1遺跡B地区（報告未）なども併せ観る必要があろう。

さて、この時屋地区の報告書第Ⅱ集（第1分冊）に採録された上の原第2遺跡、第1遺跡、第4遺跡については、紙数の制約から、出土遺物や一部の遺構についての記録やその評価を行う作業が不十分となっており、編者として甚だ悔いの残るものになったことをここで記しておかねばならない。さらに、この章でも、当初地区全体を見据えた形で考察を行うことを計画したが、それも実現できなかった。

そこで、ここでは時間の断片を示すと目される良好な一括資料や、重要な意味を有すると見られる資料について、引き出しが容易になるように時代毎に整理し、全体のまとめとしたい。

縄文時代早期については、繰り返し述べるように遺構・遺物の分布密度が低い調査地点がほとんどで検出遺構も集石遺構・砾群のみである。ただし白ヶ野遺跡B地区のみは比較的多量の遺物が出土しており、出土層の分析から押型文系土器→平椿式・窓ノ神式という変遷を追認する結果が得られている（第Ⅱ集第2分冊）。

縄文時代中期中葉～末にかけての時期では、上の原第1遺跡の竪穴・土坑群と、その周囲から出土した土器群が注目される（第Ⅱ集第1分冊）。遺構については1号竪穴～7号竪穴の一群、8号竪穴～16号竪穴の一群といったグルーピングが可能になってくると考えられる。時期は石剣に係わる遺構である21号竪穴を含めて、春日式期に属する遺構が多いように見受けられるが、18号竪穴は確実に大平式期の遺構と認定できるものであり、重要な意味を持つ。

縄文時代後期前葉～中葉の竪穴・土坑群が、上の原第2遺跡で確認された（第Ⅱ集第1分冊）。多量の土器が出土しているが、中でも40号竪穴や57号土坑出土土器群などが、重要な一括資料と評価できるものである。また構造に関して、高い削合で床面中央部に土坑を有する点が興味深い。

縄文時代晚期の竪穴住居跡は検出されなかつたが、土坑（貯蔵穴か）が上の原第1遺跡で多数検出された（第Ⅱ集第1分冊）。特に26号土坑出土土器が同時期に属する良好な資料である。

弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡が上の原第1遺跡で6基検出されたほか、谷を隔てた第4遺跡で「土器集中区」が確認された（第Ⅱ集第1分冊）。

古墳時代前期に関しては、上の原第1遺跡の「土器埋納遺構」が注目される（第Ⅱ集第1分冊）。「水」「水源」祭祀に関わるものと位置づけたが、今後広く類例を探索していきたい。

古墳時代中期～後期の尖底跡が上の原第3遺跡で確認された（第Ⅰ集）。須恵器のT K208～T K23（一部下ってT K10）示準期の良好な一括資料である。

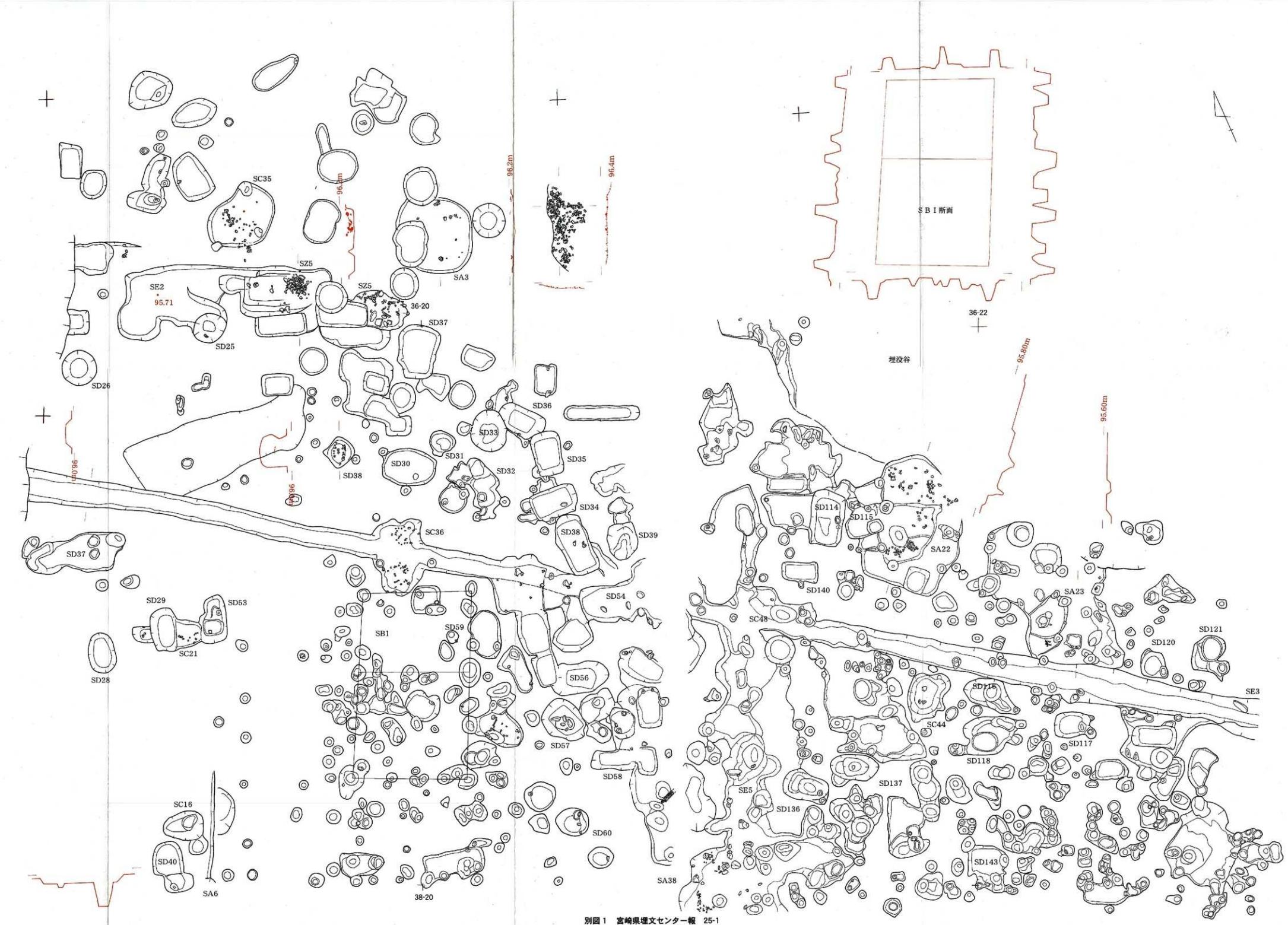
古代に関しては、白ヶ野第3遺跡B地区で、カマドを有する竪穴住居跡3基が検出された（第Ⅱ集第2分冊）。概ね9世紀代の所産と考えられるものである。

中世末～近世に関しては、上の原第2遺跡においておびただしい数の柱穴・土坑（土壙墓）が検出され、あわせて陶磁器類が多量出土しており、それらを編年的・空間的に位置付ける作業が求められるところであるが、あまりに膨大な資料数であるため、未だ成し得ていない。とりあえずは、掘立柱建物群が一部中世末に遡る時期から營まれ、その廃絶後、墓地が展開したと考えているが、今後検証していきたい。

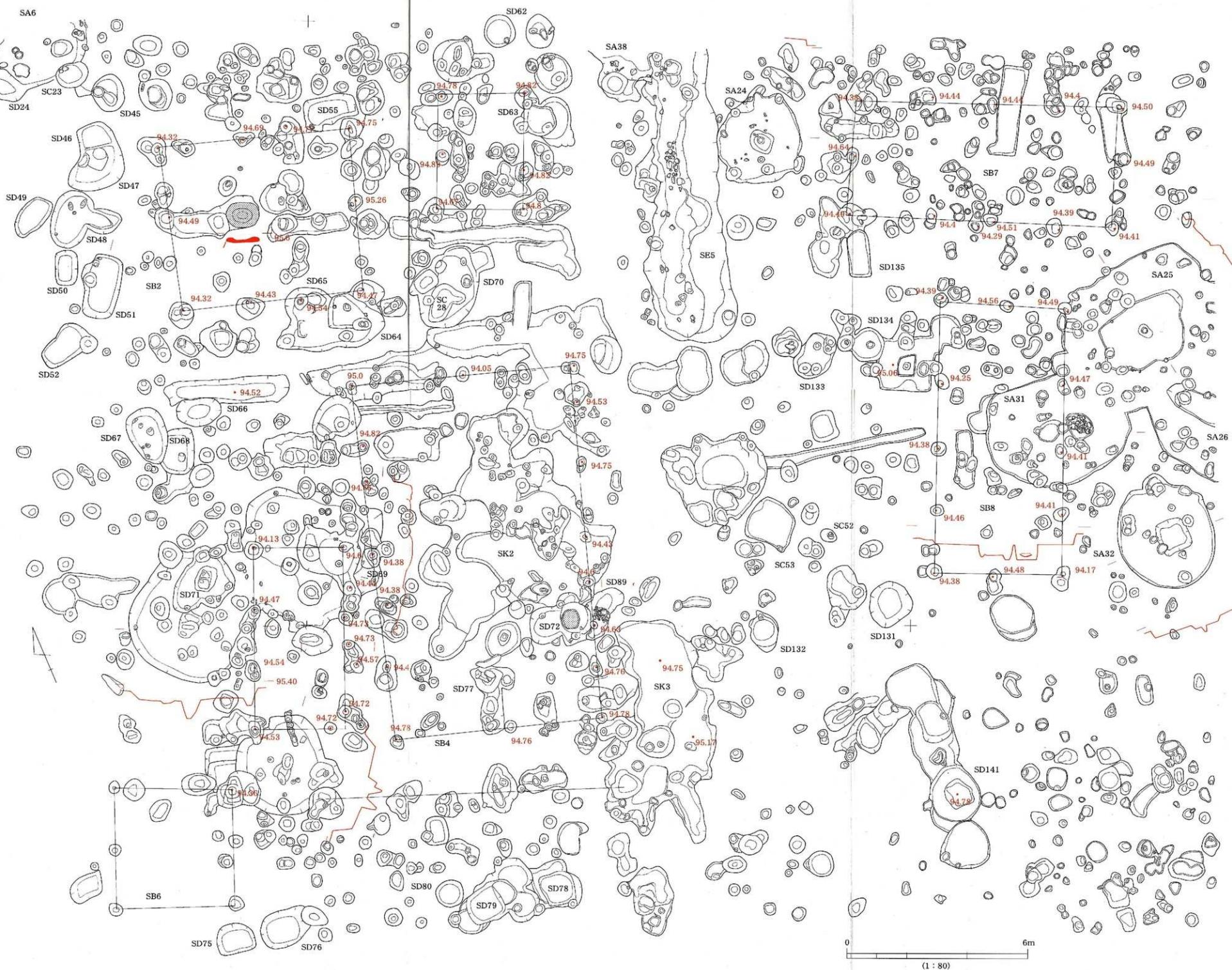
それらの上に、畠地が一面に広がる現代の光景が展開している。今後、当台地上ではどのような歴史が刻まれていくのであろうか。

報告書抄録

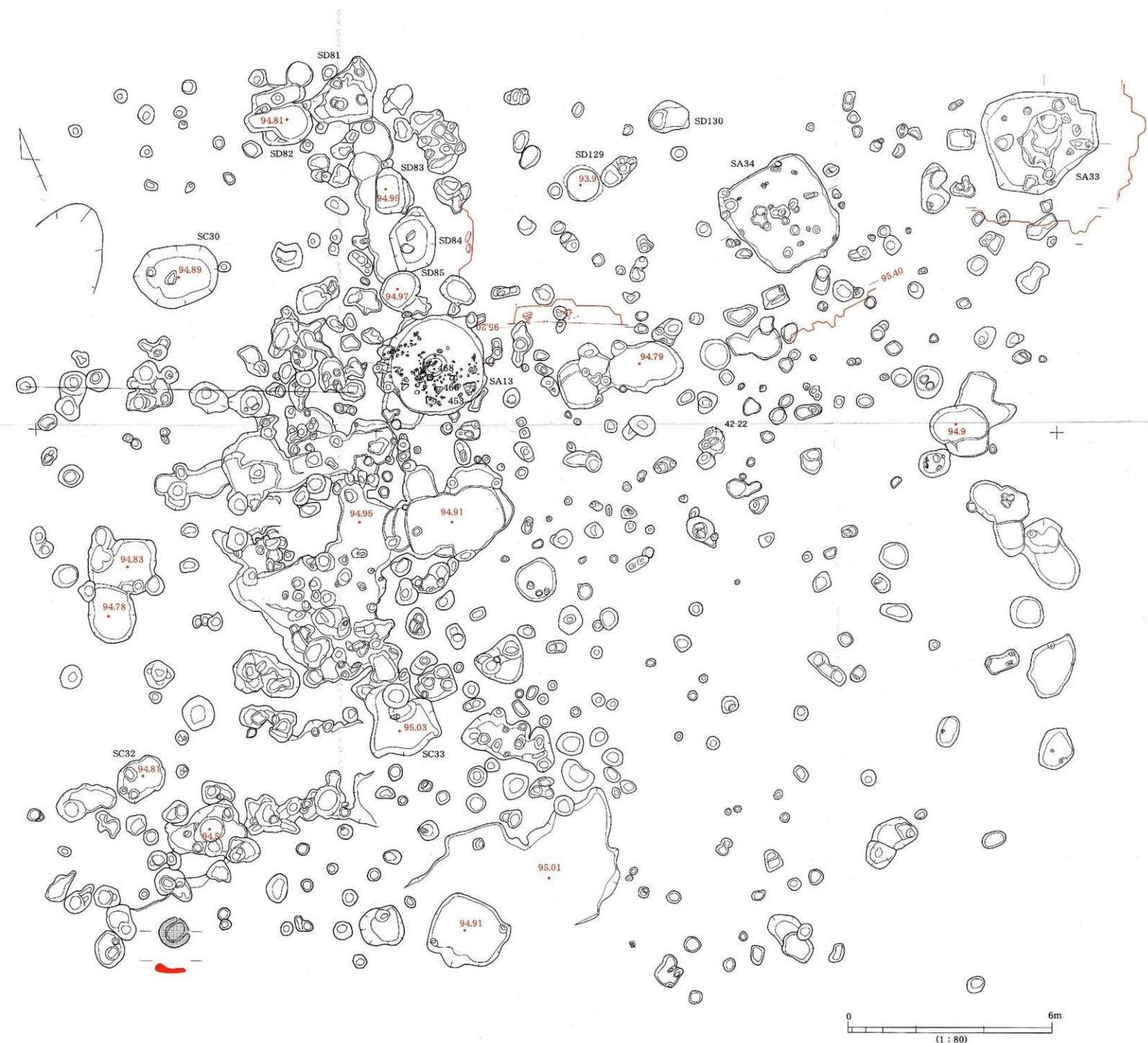
書名	上の原第2遺跡 上の原第1遺跡 上の原第4遺跡 白ヶ野第3遺跡A地区				
副書名	時屋地区農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書				
卷次	第Ⅱ集				
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書				
シリーズ番号	第25集(第1分冊)				
編集者名	吉本正典				
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター				
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地				
発行年月日	2000年3月31日				
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積
上の原第2	宮崎市大字細江字	31° 52'	131° 21'	940422~1101	45,500m ²
上の原第1	時雨柳追			950424~1128	48,000m ²
上の原第4	清武町大字船引字			950515~0829	3,400m ²
白ヶ野第3 A地区	上の原			950830~1012	300m ²
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ほ場整備	集落	縄・弥(末) ・古・中~近	堅穴(住居跡) ・土坑集石遺構	土器・陶磁器 石器・石剣	「土器埋納遺構」



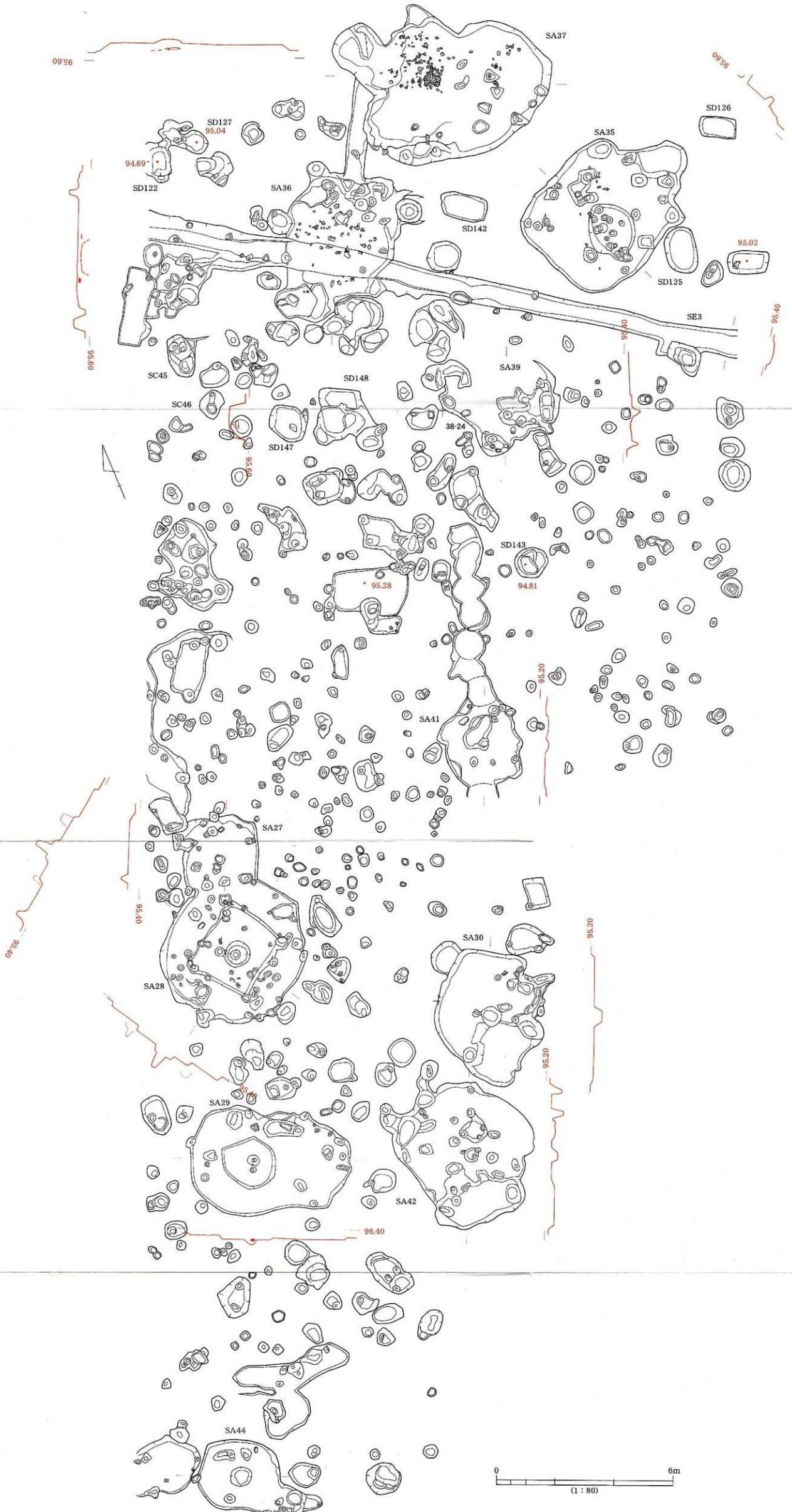
別図1 宮崎県埋文センター報 25-
上の原第2遺跡



別図2 宮崎県埋文センター報 25-1
上の原第2遺跡



別図3 宮崎県埋文センター報 25-1
上の原第2遺跡



別図4 宮崎県埋文センター報 25-1
上の原第2遺跡

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第25集

上 の 原 第 2 遺 跡

上 の 原 第 1 遺 跡

上の原第4遺跡 白ヶ野第3遺跡A地区

県営農地保全整備事業時度地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

第1分冊

2000年3月31日

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地

T E L 0985-36-1171

印 刷 宮崎紙工印刷株式会社

〒880-0921 宮崎市本郷南方4045-4

電 話 0985-56-2324